

## 呼ばり石は知っている

三拍子の入口に呼ばり石という二つの大岩がくぬぎ林の中に立っている。今から六百年程前の南北朝時代、靈山城にこもった征夷大將軍陸奥守北畠顯家の家臣に手渡八郎義為という強いさむらいがおった。八郎は手渡の館山に館を築き、近隣の北朝方の敵軍を散々なやまして武勲をたてたが、その後顯家卿に従って西上し摂津国阿部野の戦でついに敗れ、堺浦の近く石津で顯家卿が戦死したのを見届けた。この様子を靈山城に残っていた顯家の奥方に知らせようとはるばる遠路ふるさとの手渡までたどりついた。しかし、その時靈山城は既に敵將吉良貞家の大軍にかこまれ、城内の残兵を散り／＼に落ちのび行方さえもわからない。八郎は奥方の行方をさがして、靈山より南方布川入から細布までやって来た。しかし逃げのびた奥方たちの一行にはついにめぐり会うことができなかつた。八郎は疲れたからだを横たえ、今後どうしようかと思つづく考えた。顯家夫人に従つて、八郎の恋人八重野もこの落人一行に加わっていたに違ひなかつた。八郎は、傷ついたのでからだをこの石の上に運んだ。そして八重野を声限り呼んだのである。

「オーイ八重野!!八郎が帰つて来たぞう!!」

「奥方はどちらですか!!八重野も無事か!!」

何回も何回もこの石の上に立って呼びかけたが、ただ空しく山彦が響くばかり、何の答えさえもなかつた。八郎は涙ながらに呼びつづけていたが、声も枯れのどから血がほとばしり、つばをのむことさえ出来なくなつた。今はこれまでと覚悟し、自からこの岩上に若い生命を断つたのである。